

# 【熊本S. J. C. D. 例会 抄録】

**演 題** 生理的に調和した Occlusal Contact を付与した一症例

**演者名** 有吉史郎

**日 付** 2007年7月24日

**keywords**

1. 咬合高径
2. 咬合平面
3. Occlusal Contact

## 抄 録

私たちが患者の口腔機能の維持をはかるうえでもっとも重要なことは、力のコントロールと炎症のコントロールである。しかし、この両方ともに我々医療人が手を加えたために、破壊されている症例が多い。患者にとって何が問題点なのか、またそれを改善するためにどうすればいいのか、ということを確認し、治療計画を立て、ステップごとに自分が行った治療の結果が出ているのかを確認しながら、次のステップに進むことによって正しい医療が行われる。

今回、咬合再構成を行うことにより、患者の満足を得ることができた症例を提示し、現在私が行っている治療法を述べさせていただきます。

患者様は54歳の女性で、2006年2月18日、全顎的な治療を希望され来院した。来院時、歯周病は軽度であったが、不適合補綴物が口腔内に多くみられ、二次カリエスに罹患している歯牙もあった。歯科的既往歴を問診すると、毎回主訴のみの治療で終わっていたが、今回、審美的にも気になり始めてきたため、全顎的な治療を希望して来院された。

全顎的な治療を行うため、X-Ray 診査（パノラマ・セファロ・デンタル）、ペリオチャート、アキシオグラフによる咬合診査を行った後、プロビジョナルレストレーションを作成・セットし、咬合の安定を図った。その後、根管治療の不十分な歯牙に対しては根管治療を行い、発音、咀嚼、発音を確認、最終補綴へと移行した。患者の満足は得られたものの、再評価時に審美的にやや不満の残るものであったため、患者の了解を得て、一部再作製を行いファイナルレストレーションとした。

診断、治療計画、審美について、諸先生方のご指導宜しく申し上げます。